

附録香志目錄

香木類

奇南香

赤梅檀

香器類

古香爐

薰爐

異形香爐

沈香  
多伽羅香



香爐

被中爐

銅鍬

香道系ノ具

香帚

香匙

隔火

爐灰

香都總匣

香床

香几

薰籠

火筋

筋瓶

香盒

香炭壑

香囊

香卓

香盤

香裏

附録香志目錄

香木類

奇南香 (伽羅)

赤梅檀

香器類

古香炉

薰炉 (火取香炉)

異形の香炉

沈香  
多伽羅香

香炉

被中炉 (廻香炉)

銅鍬 (灰押)

香帚 (羽箒)

香匙

隔火 (銀葉)

炉灰 (香炉灰)

香都総匣 (十種香箱)

香床 (香盆)

香机 (文台)

薰籠 (伏籠)

火筋

筋瓶 (火筋建)

香盒 (香箱)

香炭壑 (香炭団)

香囊 (香袋)

香の卓

香盤

香裏 (香包)

香遠形ノ災

香志目録終

雜類 雜器

靈灰 藏香 生香 焚香 論香

始於漢

尾煙 埋火 鬪香 述香

香志目録 終

- 【凡例】
- ① 句読点、「」、送り仮名等は適宜追記しました。
  - ② 旧仮名使いを新仮名使いに適宜改めました。
  - ③ 傍線部は、人名です。
  - ④ 黒字の（）は、本文内に小文字で記された注記です。
  - ⑤ 青字の（）は、筆者の補足です。
  - ⑥ 赤字は、判読等に曖昧な点がある部分です。

雜器

雜類

靈灰（灰温む）  
香を蔵む  
生香（火取り香）  
香を焚くは漢より始まる  
香を論ず

尾煙（火末）  
埋火（火加減）  
鬪香（香合せ）  
香を述ぶる

崑脩然先生編輯

# 香志

杏熏堂發行

崑脩然先生編輯

## 香志

杏熏堂發行

誘閣列華筵  
爐薰百和烟



江鈞隱寫



誘閣列華筵

爐薰百和烟

江鈞隱  
寫

香志

○香木類 巖信備狀父輯

奇南香

此土呼為加羅者是也

又名楳楠香一名加

藍香一名奇楠香一名

奇藍香共同

奇南香原屬沈香同類因樹分

奇南香原屬沈香同類因樹分

香志

○香木類 巖信備然父 誦

奇南香

この土に呼んで「加羅」と為す者これなり。

また、一に「楳楠香」と名づけ、一に「加

藍香」と名付け、一に「奇楠香」と名づけ、

一に「奇藍香」と名づく。共に同じ。

奇南香、もと沈香の同類に属す。樹に因りて牝牡を分かつは

年時季ノ別

牝牡則陰陽形質臭味情性各  
名差別其成沈之本為牝為陰  
故味厚性通利臭含藏焚之臭  
轉勝陰體而陽用藏精而起亟  
也成奇南之本為牡為陽故味  
辣臭顯發性禁止繫之閉二便  
陽體而陰用衛外而為固也至  
若等分黃棧品成四結狀肖四

一

則ち、陰陽、形質、臭味、情性、各々名差別す。

その沈を成すの本、牝と為し、陰と為す。

かるが故に、味厚く、性、通利す。臭い含み蔵れ、これを焚くに、

臭い転(IIますます)勝る。

陰礼にして陽用、精し蔵して、起こり亟(速)やかなり。

「奇南」と成すの本、「牡」と為し、「陽」と為す。

かるが故に、味辣く、臭い顕われ発す。

性、禁止、これを繫れば、二便を閉ぐ。

陽體にして陰用、外を衛して固と為すなり。

等(級)「黄棧」を分かち、品、四結を成す。状、四十有二を肖す

るがごときに至りて、

十有二則一矣第牝多牡少獨  
 奇南世稱至貴即黃棧二等亦  
 得因之以論高下沈本黃熟固  
 坎端棕透淺而材白臭亦易散  
 奇本黃熟不惟棕透而黃質遠  
 理猶如熟色遠勝生香熟炙經  
 旬尚襲々難過也棧即奇南液  
 重者曰金絲其熟結生結蟲漏

脱落四品雖統稱奇南結而四  
 品之中又各分別油結糖結密  
 結綠結金絲結為熟為生為漏  
 為落井然成秩耳大都沈香所  
 重在質故通體作香入水便沈  
 奇南雖結同四品不惟味極辛  
 棘著舌便木顧四結之中每必  
 抱木曰油曰糖曰密曰綠曰金

則ち一つなり。

ただ、「牝」多く「牡」少なし。

独り奇南、世に「至貴」と称す。

「黄棧」の二等につき、またこれに因りて以て高下を論ずることを得るに、沈本の黄熟はもとより、坎端、棕透浅くして、材白く、臭いまた散じ易し。

奇本、「黄熟」は、ただ棕透するのみにあらずして、黄質、遂理なお熟色の如し。

生香に勝れること遠し。

熟炙、旬を経てなお襲々として、過ぎ難きなり。

「棧」は即ち奇南液重の者「金絲」という。

その熟結、生結、蟲漏、

脱落、四品すべて「奇南結」と称すと雖も、しかも四品の中に、また各々分別す。

「油結」「糖結」「密結」「緑結」「金絲結」、「熟」と為し、「生」と為し、「漏」と為し、「落」と為し、井然として秩(位)を成すのみ。

大都、沈香重んずる所、質に在り。

かるが故に、通體、香を作す。

水に入るれば、すなわち沈む。

奇南は、結四品と同じと雖も、唯、味わい極めて辛辣ならず。

舌に著(着)いて、すなわち木す。

顧みるに四結の中(中)に必ず

木を抱く。「油」といひ、「糖」といひ、「密」といひ、「緑」といひ、

絲色相生成亦迥別也明倪朱謨本草彙言(書名)  
 奇南香名蓋言南方之奇木也  
 亦作奇藍乃沈香木之生結者  
 古人詩多用沈香而不見奇南  
 之名亦遺事也故拈出之明田藝蘅留青日札  
 占城奇南出在一山箇長禁民

不得采取犯者斷其手彼亦自  
 貴重星槎勝覽作琪楠潘賜使  
 外國回其王餽之載在志則作  
 奇藍此當是明陳繼儒偃曝談餘  
 奇南香味辛辣氣溫無毒其生  
 成出處主治功用與沈香同但  
 性氣較沈香稍潤緩耳氣惟含  
 攝能縮二便今講官入直經筵

「金絲」という色、相生し成る。また遙かに別なり。

明の倪朱謨(著者)『本草彙言』(書名)

「奇南」は香の名、蓋し言う南方の奇木なり。  
 また「奇藍」に作る。乃ち沈香木の生結する者  
 古人の詩多く、「沈香」を用ゆ。  
 而うして「奇南」の名を見ず。また遺事なり。  
 かるが故にこれを拈出す。

明の田藝蘅『留青日札』

占城(ベトナム)、「奇南」出ること一山に在り。  
 酋長、民を禁じ、採り取るを得ず。犯す者は、その手を斬る。  
 彼、また自ら貴重す。

『星槎勝覽』(明の費信著)に「琪楠」と作す。

潘賜(明の政治家)、外国に使いし帰る。

その王これを餽(贈)る。

載せて志に在るは、則ち「奇藍」に作る。

これまさに是的なるべし。

明の陳繼儒『偃曝談餘』

奇南香、味わい辛辣、氣温、毒無し。

その生成、出處、主治、功用、沈香と同じ。

但し、性氣、沈香に較ぶれば、やや潤緩なるのみ。

氣、ただ含摂よく二便を縮む。

今講官に入つて經筵に宿直するに

常佩此香以免泄氣本一竹  
 沈香奇南同類自分陰陽盧頭  
 曰沈牝也味苦性利其香含藏  
 燒更芳烈陰體陽用也奇南牡  
 也味辣黏舌麻木其香忽發而  
 性能閉二便陽體陰用也奇南  
結油其屑成團細刺者此  
方氏物理小識

占城國其國所產巨象犀牛甚  
 多象牙犀角廣貨別國採楠香  
 在一山所產箇長差人禁民不  
 得採取犯者斫其手烏木降香  
 煎之為薪天無霜雪氣候常熱  
 如夏木長青隨花隨結煮海  
 為鹽禾稻甚薄國人惟食檳榔  
 裹葉包蠶殼灰行住坐臥不

常にこの香を佩びて、以て泄氣(放屁)を免る。

明の倪朱謨『本草彙言』

「沈香」「奇南」、同類。自ずから陰陽を分かつ。

盧頭が曰く、沈は牝なり。味わい苦く、性利、その香(匂)含藏す。焼いて更に芳烈、陰體にして陽用なり。

奇南は牡なり。味わい辣く舌に黏(粘)じ麻木す。

その香、忽ち発して性能く二便を閉ぐ。

陽體にして陰用なり。

奇南、緑結、油結、糖結、密結、金絲、虎斑等あり。

これを鋸するに、その屑、團を成す。舶来の者、佳沈は、則ち瓊甜。

○清の皖桐の方氏(方以智)が『物理小識』

占城国、その国産する所、巨象、犀牛、甚だ多し。

象牙、犀角広く別国に貨(輸出)す。

琪楠香、一山に在つて産する所、首長、人を差(遣)わし、民を禁じ、採り取るを得ず。犯す者はその手を斬る。

烏木、降香、これを樵り薪と為す。

天霜雪無し。氣候、常に熱く夏の如し。

夏の草木、長青し、随つて花さき、随つて結ぶ。

海を煮て塩を成す。

禾稻(穀物)、甚だ薄し。

国民ただ檳榔を食らう。

蕁(よもぎ)葉を包み、蠶(ひき)穀灰を包み、行往、座臥、

絶於口明費信星  
 棋楠香有糖結棋楠鋸開上有  
 油如餡糖黑白相間黑如墨白  
 如燥米焚之初有羊羶微氣有  
 金絲棋楠色黃止有縞若金絲  
 惟糖結為佳明屠隆考  
 榕樹千年者其上生伽南香明  
 懸仁泉南雜志

伽南香南雜志  
 香木枝柯竅露者木立死而本  
 存者氣性皆溫故為大蠟所穴  
 蠟食石密歸而遺於香中歲久  
 漸漬木受密氣結而堅潤則香  
 成矣其香本末死密氣復老者  
 謂之生結上也木死本存密氣  
 凝於枯根潤若錫片謂之糖結

口に絶やさず。

明の費信『星槎勝覽』

琪楠香、「糖結琪楠」あり。

鋸開するに、上は油有つて餡糖の如し。

黑白相まじわる。黒は墨の如し。白は燥米の如し。

これを焚くに、初め羊羶(羊の生肉)の微氣有り。

「金絲琪楠」有り。

色黄、縞、金絲のごとき有るにいたる。

ただ、糖結を佳と為す。

明の屠隆『考槃餘事』

榕樹(ガジュマル)、千年の者、その上「伽南香」生す。

明の陳懋仁『泉南雜志』

伽南香、香品、海上の諸山に雜(混)わり出す。

蓋し香木、枝柯、窮露する者、木立枯れして本存する者、氣性

皆「温」。かるが故に大蟻の為に穴せらる。蟻、石密を食らう。歸

りて香中に遺す。

歳久しくして漸漬木、密氣を受けて、結んで堅潤すれば、則ち

香成る。

その香本未だ枯れず、密氣未だ老する者、これを「生結」と謂う。

上(品)なり。

木枯れ、本存し、密氣枯根に凝り、潤い錫片のごとし。これを

「糖結」と謂う。

沈香シヤウキヤウ、瓊シヤウキヤウ、洋シヤウキヤウ、香シヤウキヤウ、燒シヤウキヤウ、之シヤウキヤウ、味シヤウキヤウ、酸シヤウキヤウ、伽シヤウキヤウ、楠シヤウキヤウ。  
明の黄表が『海語』

貴キ、洋シヤウキヤウ、而シヤウキヤウ、瓊シヤウキヤウ、為シヤウキヤウ、土シヤウキヤウ、伽シヤウキヤウ、楠シヤウキヤウ、矣シヤウキヤウ、即シヤウキヤウ、瑛シヤウキヤウ、曰シヤウキヤウ。  
明の方以智が『通雅』

次なり。

その「虎斑結」「金絲結」と称する者、歲月既に浅く、木密の氣、なお未だ融化せず、木性多くして味わい少なし。これを下とするのみ。

諸香、ひとりこの種、葉に入るに堪えず。かるが故に本草録せず。

近世士、太夫、以て帶銚を制す。率ね、多く湊合す。頗る天成の如し。純全の者、得難きのみ。

明の黄表が『海語』

沈香は、「瓊洋香」を尊ぶ。これを焼けば味わい酸し。

伽楠「洋」を貴んで「瓊」は「土伽楠」と為す。

郎漢（明代の愛書家）が曰く、潘希、曾て安南に使用す。その国「奇藍」と作す。

『星槎勝覽』『棋楠』に作る。洪洲、瓜哇、占城、奇南香を貢ずることを載す。

明の方以智が『通雅』

占城国、その国、氣候暖熱、霜雪常に無し。

四、五月の時の如し。草木、常に青し。山、加藍香、觀音竹、降真香、烏木を産す。

甚だ潤黒、絶えて他国に出る者に勝る。伽藍香の

惟此國一大山出產天下兩無  
 出處其價甚貴以銀對換觀音  
 竹如細藤棍樣長一丈七八尺  
 如鐵之黑一寸有二三節他所  
 不出明馬觀瀛  
 奇楠香其香經數歲不歇為諸  
 香之最故價轉高以手爪刺之  
 能入爪既出香痕復合如故華

夷考曰香木枝柯竅露木死而  
 木存者氣性皆溫為大蠧所穴  
 蟻食石密歸而遺於香中歲久  
 漸漬木受蜜氣結而堅潤則香  
 成矣近世以湖帶鏽率多湊合  
 願若天成純全者難得耳交趾  
 奇楠香油真者難得今人以奇

唯、この国「一大山」出産す。天下再び出る処無し。  
 その値、甚だ貴し。銀を以て対し、觀音竹に換う。  
 細藤の棍様の如し。長さ一丈七、八尺、鉄の黒きが如し。  
 一寸二、三節有り。他に出ざる所。

明の馬觀『瀛涯勝覽』

奇南香、その香(匂)數歳を経て歇まず、諸香の最と為す。  
 かるが故に値、轉(IIますます)高し。  
 手爪を以てこれを刺すに、能く爪を入る。  
 既に出でて香痕また合いて、故の如し。

『華夷考』に曰く、香木、枝柯、窮露、木枯れて木存する者、  
 氣性皆「温」。

大蟻の為に穴せらる。  
 蟻、石密を食し、歸つて香中に遺す。  
 歳久しく漸漬し、木密氣を受け結んで、堅潤なれば、  
 則ち香、近世以て帶鏽を制す。  
 率ね、多く湊合す。  
 天成の如し。純全の者、得難きのみ。

『交趾物産』○明の張燮が『東西洋考』

奇南香、油真の者得がたし。今の人、奇南香を以て

南香ナナカ碎漬クサリ之油アブラ中以モトメ蠟ロウ熬ヒク之而シテ  
 成微有ホト香氣ニ同  
 奇楠香キナン諸國シヨク出者シテ唯タ占城シヤン為佳ニ住  
 本朝ホム充チヨウ貢キョウ星シヨウ槎サ勝シヨウ覽ラン曰クハ棋楠キナン香  
 在ア一山イツサン所シヨ産サン節セツ長チヨウ禁キン民ミン不ズ得ズ採サイ  
 取ト犯ハム者シヤ斷ツグ手テ足ソク吾ウ學ガク編ヘン名ナ伽南カナン  
 香カウ占シヤン城シヤウ物モノ產サン  
 奇南香キナン又マタ曰クハ奇藍キラン沈香シヤウ生シヨウ結ケツ者シヤ  
占城物産

沈香シヤウ有ア十種ジュウシヨウ真臘シヤン為ニ上ニ占城シヤン次ニ  
沈香ノ十種  
 沈香シヤウ一名イツナ密香ミシヤウ  
 木キ之ノ心シン節セツ置チ水スイ則スレバ沈シヤウ故コト名ナ沈シヤウ水スイ  
 亦マタ曰クハ水スイ沈シヤウ半ハン沈シヤウ者シヤ為ニ棧香セツカウ不ズ沈シヤウ  
 者シヤ為ニ黃熟ワウジュク香カウ南越ナンゲツ志シ曰クハ交州キョウシウ人ジン  
 編ヘン為ニ密香ミシヤウ謂フ其氣キ如シ密脾ミシヤウ也ナリ梵バン  
 書シヤ名ナ阿迦アキヤ噓香ウシヤウ細サイ本ホン目メ

碎き、これを油の中に漬し、蠟を以てこれを煮て成す。  
 微しき香氣あり。

同上

奇南香、諸国出ずる者、唯、占城を佳(品)と為す。  
 本朝、貢に充つ。

『星槎勝覽』曰く棋楠香、一山に在りて産する所、酋長、民を  
 禁じ採取することを得ず、犯す者は手足を断つ。

『吾学編』に「伽南香」と名づく。  
 『占城物産』○同上

奇南香、また「奇藍」という。沈香の生結なる者  
 沈香、十種あり。真臘(カンボジア)を上(品)と為す。  
 占城これに次ぐ。

『事物紺珠』(明の黄一正)

沈香シヤウ 一名 沈水香  
 一名 密香

木の心節、水に置くときは、則ち沈む。  
 かるが故に「沈水」と名づく。また「水沈」という。  
 半ば沈む者「棧香」為す。沈みざる者「黄熟香」と為す。  
 『南越志』に曰く交州の人、称して「密香」と為す。  
 その氣、密脾の如きを謂うなり。  
 梵書に「阿迦噓香」と名づく。

『本草綱目』

恭曰沈香青桂雞骨馬蹄煎香  
 同是一樹出天竺諸國木似樺  
 柳樹皮青色葉似橘葉經冬不  
 凋夏生花白而圓秋結實似檳  
 榔大如桑椹紫而味辛藏器曰  
 沈香枝葉並似椿曰似橘者恐  
 味是也其枝節不朽沈水者為  
 沈香其肌理有黑脈浮者為煎

香雞骨馬蹄皆是煎香並無別  
 功止可熏衣去臭宗爽曰嶺南  
 諸郡悉有傍海處尤多交幹連  
 枝岡嶺相接千里不絕葉如冬  
 青大者數抱木性虛柔山民以  
 構茅蘆或為橋梁為飯甑為狗  
 槽有香者百無一二蓋木得水  
 方結多在折枝枯幹中或為沈

恭いう、沈香、青桂、雞骨、馬蹄、煎香、同じくこれ一樹、天竺諸国に出す。

木、樺柳木に似たり。皮、青色、葉、橘葉に似たり。冬を経て凋まず、夏花を生ず。白くして円かなり。秋、実を結ぶ。檳榔に似たり。大きな桑椹の如し。紫にして、味わい辛し。

藏器が曰く、沈香、枝葉並びに椿に似たり。橘に似たりという者は、恐らくはこれなり。

その枝節朽ちず、水に沈む者は「沈香」と為す。その肌理、黒脈有り。浮かむ者は「煎香」と為す。

雞骨、馬蹄、皆これ煎香並びに別功無し。

衣を熏へ、臭いを去るべきにいたる。

宗爽曰く、嶺南の諸郡、悉く海に傍（浴）う処有り。尤も、多く幹を交え、枝を連ね、岡嶺相接し、千里絶えず、葉、冬青の如し。

大いなる者は、数抱、木性虚柔、山民以て茅蘆を構う。或いは橋梁と為し、飯甑と為し、狗槽と為す。

香有る者は、百に一、二無し。蓋し、木、水を得てまさに結ぶ多く、折枝枯幹の中に在り。或いは、「沈」と為り、

或為煎或為黃熟自枯死者謂  
之水盤香南息高竇等州惟產  
生結香蓋山民入山以刀斫曲  
幹斜枝成坎經年得雨水浸漬  
遂結成香乃鋸取之刮去白木  
其香結為斑點名鷓鴣斑燻之  
極清烈香之良者惟在瑠崖等  
州俗謂之角沈黃沈乃枯木得

本草綱目卷之二十一

者宜入藥用依木皮而結者謂  
之青桂氣尤在土中歲久不得  
剝別而成薄片者謂之龍鱗劑  
之自卷咀之柔韌者謂之黃臘  
沈尤難得也同書  
惡揭嚙蕃曰沈香  
密香沈香雞骨香黃熟香雞舌  
香棧香青桂香馬蹄香按此八

或いは、「煎」と為る。或いは、「黃熟」と為る。  
自ずから枯死する者は、「水盤香」と謂う。  
南息、高竇等の州は、唯「生結香」を産す。  
蓋し、山民、山に入り刀を以て曲斜枝を研し、坎(穴)を成し、  
年を経て雨水を得、浸漬結して香を成す。  
乃ち鋸してこれを取り、白木を去る。  
その香、結して斑点を為す。「鷓鴣斑」と名づく。  
これを燻(燃)やするに、極めて清烈香の良なる者、  
唯、瑠崖等の州に在り。  
これを「角沈」と謂う。黄沈は枯木得る者、薬用に入るべし。

木皮に依りて決する者は、これを「青桂」と謂う。  
尤も、土中に在り、歳久しく剝別を得ずして薄片を成す者、  
これを「龍鱗」と謂う。  
これを削れば、自ずから巻き、これを咀(嚙)めば柔韌なる者、  
これを「黄臘沈」と謂う。尤も得難きなり。

同書集解

「惡揭嚙蕃」に沈香をいう。

『事物紺珠』

密香、沈香、雞骨香、黃熟香、雞舌香、  
棧香、青桂香、馬蹄香、按ずるにこの八

香同出于一樹也。交趾有密香樹。幹似拒柳。其花白而繁。其葉如橘。欲取香伐之。經年其根堅。枝節各有別色也。木心與節堅。黑沉水者為沉香。與水面平者為雞骨香。其根為黃熟香。其枝為棧香。細枝緊實。味爛者為青桂香。其根節輕而大者為馬蹄香。

唐書地理志云

香其花不香。成實乃香。為雞舌香。珍異之木也。唐馬贄南越秀卿又頑蒼共沉香異名。物類記云。密香樹如椿。伐木仆之。數年外腐。乃取其中節。又名多香木。出海南。色褐黑。有白。鷓鴣斑香。出海南。色褐黑。有白。

香同じくして、一樹に出るなり。

交趾、密香樹有り。枝、拒柳に似たり。

その花、白くして繁し。その葉は橘の如し。

香を取らんと欲してこれを伐つて、年を経て、その根幹枝節、各々別色有るなり。木心と節と堅く黒し。

水に沈む者、「沉香」と為す。

水面と平らかなる者は「雞骨香」と為す。

その根「黄熟香」と為す。その枝「棧香」と為す。

細枝緊実、未だ爛せざる者「青桂香」と為す。

その根節、軽くして大いなる者「馬蹄香」と為す。

その花香わず、実を成す。乃ち香ばし。「雞舌香」と為す。

珍異の木なり。

唐の馬贄『南部烟花記』

「遠秀卿」、また「頑蒼」、共に沈香の異名

『事物紺珠』

密香樹、椿の如し。

気を伐り、これを仆(倒)して数年、他腐り、乃ちその中の節を取り、また「多香木」と名づく。海南に出ず。

上同書

鷓鴣斑香、海南に出ず。色、褐黒、白斑有り。

斑如鷓鴣臆毛氣清婉如蓮花  
上同  
檀香一名真檀  
時珍曰檀善木也故字從亶  
善也釋氏呼為旃檀以為湯沐  
猶言離垢也番人訛為真檀雲  
南人呼紫檀為勝沉香即赤檀  
也本草綱目

藏器曰白檀出海南樹如檀  
曰紫真檀出崑崙盤々國雖不  
生中華人間遍有之頌曰檀香  
有數種黃白紫之異今人盛用  
之江淮河朔所生檀木即其類  
但香爾  
時珍曰按大明一統志曰檀香  
出廣東雲南及占城真臘瓜哇

鷓鴣の臆毛の如し。氣、清婉(艶)にして蓮花の如し。

同上

檀香 一名 真檀

一名 梅檀

(李)時珍曰く、檀は善木なり。

かるが故に字「亶」に従う。亶は善なり。

釋氏、呼んで「旃檀」と為す。湯沐「離垢」と言うがごとしなり。

番人訛りて「真檀」と為す。

雲南の人「紫檀」と呼ぶ。沈香に勝れりと為す。

即ち「赤梅檀」なり。

『本草綱目』

藏器曰く、白檀、海南に出ず。樹、檀の如し。

恭がいう、紫真檀、崑崙(カンボジア)盤々国に出ず。

中華に生せずと雖も、人間遍くこれ有り。

頌曰く、檀香數種、黃、白、紫の異なる有り。

今の人、盛んにこれを用ゆ。

江淮、河朔生する所、檀木、則ちその類。

但し、香はしからずのみ。

時珍曰く、按ずるに、『大明一統志』に曰く、檀香、

廣東、雲南及び占城、真臘、瓜哇(ジャワ)

渤泥(ブルネイ)、暹羅(タイ)、三佛齋(スマトラ)、回回(ウイグ  
 ル)等の国に出ず。  
 今、嶺南(中国南嶺山脈の南)諸地、また皆これ有り。  
 樹葉、皆、荔枝に似たり。皮、青色にして滑澤。  
 葉廷珪が『香譜』に曰く、皮、実にして、色、黄なるもの「黄檀」と  
 為す。皮、潔して色白き者「白檀」と為す。  
 皮、腐(朽)ちて色紫なる者は「紫檀」と為す。  
 その木並びに堅重清香にして白檀は尤も良し。  
 よろしく紙を以て封収すべし。則ち氣を洩らさず。  
 王佐格『古論』に曰く、紫檀、諸溪峒(中国西南部の小河川域)  
 これを出す。

峒出之性堅新者色紅舊者色  
 紫有蟹爪文新者以水浸之可  
 塗物真者指壁上色紫故有紫  
 檀色黄檀最香俱可作带髹扇  
 骨等物同集  
 多加羅香  
 釋氏會要曰多加羅香此曰根  
 香

性、堅し。新たなる者は色赤し。舊(古)き者は色紫なり。  
 蟹爪文(※)有り。

※蟹爪のような形をした裂文  
 新たなる者、水を以てこれを浸して物を染むべし。  
 真なる者は、壁上に摺つて、色紫故に「紫檀色」有り。  
 黄檀は、最も香ばし。俱に带髹・扇骨等の物と作すべし。  
 同集解

多加羅香  
 たぎやらこう

釋氏『會要』に曰く、多加羅香、これを「根香」という。  
 洪芻『香譜』及び『事物紺珠』また「多加留」という。

○香器類  
 尚古無香焚蕭艾尚氣臭而已  
 故無香爐今所用者皆古之祭  
 器鼎彝之屬非香爐也惟博  
 山爐乃漢太子宮中所用香爐  
 也香爐之製始於此多有象  
 古新鑄者當以體質顏色辨之

香爐  
 燬以宣銅潘銅彝爐乳燬如茶  
 盃式大者為適用雅觀焚香  
 官哥定窑龍泉宣銅潘銅彝爐  
 乳燬大如茶杯而或雅者為上  
 燬生  
 燬生  
 燬生

○香器類

古香爐

尚古、香焚く無し。蕭艾（リ蓬）を焚く。なお、氣臭きのみ。  
 故に、香爐無し。今、用いる所の者、古の祭器  
 鼎彝の属、香爐に非ざるなり。  
 唯「博山爐」乃ち漢の太子、宮中に用ゆる所の香爐なり。  
 香爐の製、ここに始まる。多く古に象りて、新たに鑄る者有り。  
 まさに體質顏色を以てこれを辨ず。

『遵生八牋』また、洞天『清録』載する所、大同小異

香爐

燬、宣銅、潘銅、彝爐、乳燬を以てす。  
 茶盃の式の大いさの如くなる者を適えりと為す。雅觀を用ゆ。

『焚香七要』

官哥、定窑、龍泉、宣銅、潘銅、彝爐、  
 乳燬の大いさ茶杯の如くにして、或いは雅なる者を上とす。

『遵生八牋』

薰燬

書齋中薰衣炙手對客常談之  
 具如倭人所製漏空罩蓋漆鼓  
 可稱清賞今新製有罩蓋方圓  
 爐亦佳  
 被中爐  
 長安巧工丁諶作臥褥香爐一  
 名被中爐本出房風為機環轉  
 運四周而爐體臥常平可置之  
 西京雜記

被褥也  
 古玩中香爐一物其體極靜其  
 用又妙在極動是一日數遷其  
 位片刻不容膠柱者也  
 錘即香毬又司馬長卿美人賦  
 金鉦薰香  
 金鉦香毬曰金鉦用幾圓  
 香毬  
 西京雜記  
 美人賦  
 幾圓  
 行厨集

書齋の中、衣薰へ、手を炙り、客に対す常談の具。  
 倭人の製する所の漏空の罩蓋、漆ぬりの鼓の如き  
 清賞と称すべし。今、新製罩蓋有る方圓の爐、また佳なり。

同上

被中爐 まわりごころ  
 西京雜記

長安の功工、丁諶、臥褥の香爐を作る。  
 一名「被中爐」本、房風に出ず。  
 機環を為し、転運四周にして、爐體臥して平かなり。  
 被褥にこれを置くべし。

『西京雜記』

古玩の「中香爐」一物、その体極めて静かなり。

その用いよう、また妙、極動に在り。

これ一日数々その位を遷す。片刻、膠柱を容れざる者なり。

『間情寓寄』

鉦(金偏に匝)は、即ち「香毬」、また司馬長卿『美人の譜』に

「金鉦」香を薰ず。

『字彙』

金鉦は、香毬を金鉦という。幾圓を用ゆ。

『行厨集』

香毬 『楊升庵集』

臥褥香爐 被中香爐 滾毬

共に『候鯖録』

鐵 入 炭 之 銅 鐵  
 雜 作 準 以 後 鐵  
 火 平 之 灰 高 下 不 齊 故 用  
 鐵 行 厨 銅 鐵 香

假 爐 爐 角 端 異 漆  
 倭 香 鴨 小 羊 厨 手 爐 異 漆  
 生 以 上 香 爐 香 爐 香 爐 香 爐  
 獸 獸 香 爐 香 爐 香 爐 香 爐  
 不 二 香 爐 香 爐 香 爐 香 爐  
 宋 異 錄

異形香爐類

角端爐 狻猊の爐 鵲尾爐 香爐柄有り。  
手爐 僧道執つて以て香を焚く。

以上『事物紺珠』

宣爐 『行厨集』に曰く、香爐、明の宣徳年の製なる者の宣爐という。

小鼎爐 小香爐 大香猊 香鶴

鴨爐 香獸 獸蓋香爐 假倭爐

不二香爐

以上『遵生八牋』  
宋の『陶異録』

博山爐 宋の『陶異録』に曰く、博山香爐、湯をして潤氣、香を蒸し、

海水の四環に象るなり。

○信(岩田信安)、按ずるに、本邦の香道秘傳「二重香爐」と為す者、その図、即ち『古器具名』に載する所の「博山爐」なり。また按ずるに、本邦の「丁子釜」、またこの遺製か。

銅鉄

灰を入るのの後、爐の灰高下齋(等)しからず。故に鉄を用いて準を作して、以てこれを平らかにす。

『間情寓寄』また「銅鉄」という。

香鉄 『日用雜字』

火鉄 『行厨集』

香 錫 香 筋 之 外 復 有 貯 香 之 盒  
 與 挿 錫 筋 之 瓶 之 數 物 者 皆 香  
 也 然 此 外 更 有 一 物 勢 在 必 需  
 人 或 知 之 而 多 不 設 當 為 補 入  
 清 供 夫 以 筋 撥 灰 不 能 免 于 狼  
 籍 鑪 肩 鼎 耳 之 上 往 往 蒙 塵 必

得 一 物 掃 除 之 此 物 不 須 特 製  
 竟 用 蓬 頭 小 筆 一 枝 但 精 其 管  
 使 與 濡 墨 者 有 別 與 錫 筋 二 物  
 同 挿 一 瓶 以 便 次 第 取 用 名 曰  
 香 帚 間 情 寓 寄  
 雲 間 胡 文 明 製 者 佳 南 都 白 銅

香帚

香錫、香筋の外、また香貯うの盒と香筋挿しはさむの瓶と有り。この数物は、皆香と爐との股肢手足、或いは無くんばあるべからざる者なり。しかも、この外、更に一物有り。勢いて必ず需わるに在り。人、或いはこれを知りて、多く設けず。まさに為に清供に補い入るべし。それ、筋を以て灰を撥むるに狼藉を免るること能わず。爐肩、鼎耳の上、往々塵を蒙る。必ず一物を得て掃いてこれを除く。この物、特に製すべからず。

竟に蓬頭（ロじャもじャになった）の小筆一枝を用ゆ。但し、その管を精び、墨を濡す者と別と有らしむ。

錫・筋の二物、同じく一瓶に挿しはさむ。以て、次第に便りし用を取る。名づけで「香帚」という。

『間情寓寄』

○信、按ずるに本邦の香帚は、羽を用いてこれを作る。然れども、受用、粗そ相似たり。その様同じからずと雖も、以て来由と為すべきか。

火筋香匙

雲間の胡文明が製する者、佳なり。南都の白銅

者亦適用金玉者似不堪用生導  
 匙筋惟南都白銅製者適用製ハ  
 佳瓶用吳中近製短頸細孔者挿筋下ハ  
 筋下重不仆者似得用耳焚香  
 香匙異名盧州大中正事物紺珠  
 白銅匙柱一副匙柱餅一花鏡

吳中近製短頸細孔者挿筋下ハ  
 重不仆古銅者亦佳官哥定窑ハ  
 者不宜日用生導  
 匙柱瓶花鏡 匙筋瓶生導  
 銀錢雲母片玉片砂片俱可以ハ  
 火浣布如錢大者銀鑲周圍作ハ  
 隔火猶難得瓦蓋隔火則炭易ハ

は、また用に適う。金玉の者は、用ゆるに堪えざるに似たり。

『遵生八牋』

匙・筋は、唯、南都の白銅の製する者、用に適う。

佳瓶を製し、吳中近製の短頸、細孔をしたて用ゆ。

筋を下して、重く倒れざる者、用うるに似たるのみ。

『焚香七要』

香匙、異名、盧州の大中正『事物紺珠』

白銅の「匙柱」一副、「匙柱餅」一つ『花鏡』

筋瓶

吳中近製、短頸、細孔の者、筋を挿しはさみ下し、重くして倒れざる古銅の者また佳なり。

官哥(官窯・哥窯)、定窑(定窯)の者、日用に宜しからず。

『遵生八牋』

匙柱瓶 『花鏡』

匙筋瓶 『異家必用』

隔火

銀錢、雲母片、玉片、砂片、俱に可なり。

火浣布(石綿)を以て、錢の大きいさの如くなる者、

銀鑲(ふくりん)周圍(圍)して隔火に作る。なお得難し。

凡そ、隔火を蓋うは、則ち炭滅(消)え易し。

藏春返魂梅燒時以雲母銀葉  
 八綫  
 收起可投又火盆中薰焙衣被  
 其香盡餘塊用磁盒或古銅盒  
 有意趣且灰燥易燃謂之靈灰  
 可斷火即不焚香使其長溫方  
 眼以通火氣周轉方妙爐中不  
 滅須於爐四圍用筋直棚數十  
 十

『遵生八牋』  
 『香譜』

觀之  
 楊萬里  
 為葉輕如紙不文不武火力微  
 楊萬里琢瓷為鼎碧於木削銀  
 為葉輕如紙不文不武火力微  
 韻譜  
 燒香取味不在取煙香烟若烈  
 則香味漫然頃刻而滅取味則  
 味幽香馥可久不散須用隔火

楊萬里、瓷(甕)を琢りて鼎と為し、水よりも碧なり。  
 銀を削りて葉と為す。軽くして紙の如し。  
 文ならず、武ならず、火力、微なり。  
 『韻譜』  
 かくかしゃへん  
 隔火砂片  
 香を焼くは、味わいを取る。煙を取るに在らず。  
 香烟、もし烈(激)しきときは、則ち香味漫然として、頃刻にし  
 て滅す。  
 味わいを取るときは、則ち味わい幽かに、香馥久しく散ぜざるべ  
 し。  
 須らく隔火を用いゆべし。

有以銀錢明瓦片為之者俱俗  
 不佳且熱甚不能隔火雖用玉  
 片為美亦不及京師燒破砂鍋  
 底用以磨片厚半分火燒破砂  
 妙絕焚香七要  
 香盒  
 用剔紅簾段錫胎者以盛黃黑  
 香餅法製香磁盒用定窰或饒

旨道火うしは良

二

窰者以盛芙蓉萬春甜香倭香  
 合三子五子者用以盛沈速蘭  
 香棋楠等香外此香撞亦可若  
 遊行惟倭撞為宜焚香七要  
 砂金倭盒導生八牋  
 爐灰  
 以紙錢灰一斗加石灰二升水  
 和成團入大窰中燒紅取出又

香道集ノ其所録

三十一

銀錢、明瓦片（貝殼の薄片）を以てこれを為す者有り。

俱に俗にして佳ならず。且つ熱甚だしくして、火を隔つること能  
 わず。

玉片を用いて美と為すと雖も、また京師、焼破せる砂鍋底に及  
 ばず。

用いて以て磨片の厚さ半分火を隔つ、香を焚くに妙絶なり。

『焚香七要』

こうばこ  
 香盒

剔紅（堆朱）、簾段（竹籠）、錫胎（鑄物）の者を用ゆ。

以て黃黑香、餅法製香を盛る。

磁盒は、定窰、或いは饒窰（饒窯）の者を用ゆ。

以て芙蓉萬春甜香を盛る。

倭香合、三子（重）、五子の者は、用いて以て沈速蘭香、棋楠等の  
 香を盛る。

外、この香撞、また遊行のごとき、唯、倭撞を宜しと為す。

砂金（梨地）倭盒

『焚香七要』

導生八牋

『導生八牋』

こうろばい  
 爐灰

紙錢灰一斗を加え、石灰二升を以て、

水を和し、團と成し、大窰中に入れ、焼紅して取り出し、

研絶細入爐用之則火不滅忌  
 以雜火惡炭入灰炭襍作雜  
 則灰死不霧入火一蓋即滅有  
 好奇者用茄蒂燒灰等說大造  
 焚香  
 香爐 灰 網本日  
 香炭整  
 以雞骨炭碾為末入葵葉或葵

花少加糯米湯和之以大小鐵  
 塑槌擊成餅以堅為貴燒之可  
 久或以紅花檀代葵葉或爛素  
 入石灰和炭者亦妙焚香  
 黑太陽法出自韋郇公家用精  
 炭搗治作末研米煎粥搜和得  
 所預辨圓鐵範滿內炭末運鐵  
 面鉗實擊五七十下出範陰乾

また研り、絶細にして爐に入る。

これを用いることは、則ち火滅えず。

雜火悪炭を以てすることを忌む。

灰に入れて炭襍わるときは『八賤』『雜襍わる』に作る

則ち、灰死して霧ならず。火を一たび蓋えば、即ち滅える。

好奇の者、茄蒂の焼灰を用ゆる等の説有り。

大いに過れり。『焚香七要』

香爐灰 『本草綱目』

香炭整

雞骨炭を以て碾りて末(粉)と為し、葵葉、或いは、

葵花少しを入れ、糯米湯を加え、これを和し、大小の

鐵塑を以て槌撃し、餅と成し、堅きを以て貴しと為す。

これを焼いて久しかるべし。或いは、紅花檀を以て葵葉に代う。

或いは爛棗を石灰に入れ、炭に和する者もまた妙なり。

『焚香七要』

黑太陽の法は、韋郇公が家より出ず。

精炭を用いて、搗き治め末と作し、米煎の粥を研りて搜和し、

預め所を得て、圓き鐵の範を辨じ、炭末を内に満ちて

鐵面の鉗を運らし、五・七十下を實撃し、範を出し陰乾しす。

宋陶穀  
清異錄

香都總匣

嗜香者不可一日去香書室中  
宜製提匣作三種或用鎖鑰啓  
閉內藏諸品香物更設磁合磁  
確銅合漆匣木匣隨宜置香分  
布於都總管領以便取用須造  
子口緊密勿令香泄為佳

香都總匣

香を嗜しむ者、一日も香を去るべからず。  
書室の中、宜しく提匣を製し三種を作す。  
或いは、鎖鑰を用い啓き閉ざし、内に諸品の香物を蔵す。  
さらに磁合、磁確、銅合、漆匣、木匣を設けて、宜しきに随い香  
を置く。  
都總に分布し、管領して、以て取用に便りす。  
須らく子口を造るべし。  
緊密、香を泄らさしむることなきを佳とす。

『遵生八牋』

香遊水ノ裝匣

三十二

余欲特製遊裝備諸器具精茗  
名香同行異室茶罌一注一銚  
一小甌四洗一磁合一銅爐一  
小面洗一中副之附以香奩小  
爐香囊七筋以為半肩薄甕野  
水三十斤為半肩足矣  
都總及水三斤為半肩足矣  
七爐

特に遊裝を製し、諸器具を備えんと欲す。  
精茗、名香、同行、室を異にし、茶罌一つ、注一つ、銚一つ、小甌  
四洗一つ、磁合一つ、銅爐一つ、小面洗一つ、中これに副う。  
附するに香奩、小爐、香囊、七筋を以てす。  
以て、半肩と為す。  
薄甕水三十斤を貯え、半肩と為して足れり。

『茶疏』

○信、按ずるに、香匣及び香奩は、即ち本邦「沈筒」「炷香筒」の類いか。  
小爐は、即ち香爐なり。



香遠(和ノ)炭所録 二十四

尺八寸、或大、理石、岐陽、瑪瑙、等石、或以豆、柏、楠、椶、心、或四、入、角、或方、或梅、花、或葵、花、或慈、菰、或為、式、或漆、或水、摩、諸、木、成、造、者、用、以、欄、蒲、石、或、單、玩、美、石、或、置、香、檜、盤、或、花、尊、以、挿、多、花、或、單、置、一、爐、焚、香、此、高、几、也、若、書、案、頭、所、置、小、几、惟、倭、製、佳、絶

香卓 香卓、竹を用いてこれを為る最も清し。北方は竹無し、木を以てこれに代う。脚は、象鼻を用い、石面を嵌する者(象嵌)妙なり。もし、竹根を以てこれを為るは古怪(風変わり)を上とす。

螺鈿の卓 『事物紺珠』

書室中香几之製有二高者二

香卓

香卓、竹を用いてこれを為る最も清し。北方は竹無し、木を以てこれに代う。脚は、象鼻を用い、石面を嵌する者(象嵌)妙なり。もし、竹根を以てこれを為るは古怪(風変わり)を上とす。

『臚仙神隱』

香几

書室の中、香几の製、二つ有り。

高き者は、二尺八寸、几面、或いは大理石。岐陽の瑪瑙等の石、或いは豆柏楠を以て心を鑲し、或いは角を入れる。或いは方、或いは梅花、或いは葵花或いは慈菰、或いは式と為す。或いは漆、或いは水摩、諸木の造り成す者用いて、以て閣(棚)には蒲石、或いは単(下棚)には玩美石、香檜盤を置く。或いは花尊を以て多花を挿し挟む。或いは単には一爐を置き、香を焚く。これ「高几」なり。書案頭に置く所の「小几」、唯倭製、佳絶なり。

其式一板爲面長二尺濶一尺  
 二寸高三寸餘上嵌金銀片子  
 花鳥四簇石几面兩橫設擋二  
 條用金泥塗之下用四牙四足  
 牙口鑲金銅滾陽線鑲鈴持之  
 甚輕齋中用以陳香爐匙瓶香  
 合或放一二卷冊或置清雅玩  
 具甚妙今吳中製有朱色小几

二五五(大)二五五

二五

去倭差小式如香案更有紫檀  
 花嵌有假模倭製有以石鑲或  
 大如倭或小盈尺更有五六寸  
 者用以坐烏思藏鑲金佛像佛  
 龕之類或陳精致古銅官哥絕  
 小爐瓶焚香挿花或寘三二寸  
 高天生秀巧山石小盆以供清  
 玩甚快心目

八、暇

香道家ノ具附録

二五五

その式、一板を面と爲し、長二尺、濶さ一尺二寸、高さ三寸餘。

上、金銀の片子、花鳥四簇、石を嵌す(彫込む)。

几面、兩横、擋(筆書き)二條を設く。

金泥を用いてこれを塗る。

下、四牙の四足を用いて、牙口、鑲金、銅滾、陽線、鈴を鑲り、

これを持す。

甚だ軽くして(書)齋中用いて以て、香爐、匙、瓶、香合を陳べ、

或いは一・二の卷冊を放ちて、或いは清雅の玩具を置く妙甚だ

し。

今、吳中の朱色の小几有り。

倭を去ることやや小さし。式、香案の如し。

更に、紫檀にて花を嵌む有り。倭製を似せ模る有り。

石鑲を以てする。

或いは大いさ倭の如く、或いは小にして尺に盈つ。

更に五・六寸の者有り。

以て烏思、藏鑲、金佛像、佛龕の類いを坐く。

或いは陳き精妙、古銅、官哥、絶小の爐瓶、香を焚き、花を挿し

挟み、或いは寘に三・二寸の高さ、

天生秀功の山石、小盆を以て清玩に供す。

甚だ心目を快くす。

『遵生八牋』

香机カウキ 串ス珠ジュ 矮チ香几カウキ 花ハ鏡キョウ 香案カウアン 文モン公コウ家カ礼リ  
 香盤カウバン 烏木ウキ 為盤ヒト以玉ヒト為心ヒト用ヒト以ヒト  
 紫檀シ 楠ハ香ハ 薰籠クワンロウ  
 衣篝イカウ 行カウ厨カウ集カウ 衣薰籠イカウロウ 三才圖會サンサイトウカイ 薰籠クワンロウ 事カウ物カウ紺カウ珠カウ  
 大被薰籠ダイヒカウロウ 東宮トウキウ  
 以上四者事恐繁多不載全文  
 香道決乃と付録

香裏カウリ  
 世尊セソウ 又マタ 共トモ 難陀ナンダ 至シ 於ニ 一賣イツバイ 香底カウヂ  
 令取コト 香裏カウリ 還放マカ 地上チジョウ 嗅カウ 於ニ 手テ 着シ  
 香氣カウキ 微妙ミウカウ 大藏ダイザウ  
 至香店シカウテン 令取コト 裏香紙リカウシ 釋氏シヤクシヤ  
 雜器ザツキ  
 李煜リイツ 偽イツ 長秋チヤウキウ 周氏シウシ 居カウ 柔儀殿ユウイテン 有カウ  
 主シュ 香カウ 官カウ 女メ 其カウ 焚カウ 香カウ 之カウ 器キ 曰カウ 把カウ 子シ

香机 『事物紺珠』 矮香几 『花鏡』 香案 『文公家礼』

香盤

紫檀、烏木を盤と為し、玉を以て心と為す。用いて以て香を挿しはさむ。

『遵生八牋』

薰籠

衣篝 『行厨集』 衣薰籠 『三才圖會』 薰籠 『事物紺珠』  
 大被薰籠 『東宮舊事』  
 以上四者は、事繁多なるを恐れて全文を載せず。

香裏

世尊また難陀と共に一賣香底に至って、「香裏」を取らしむ。地上に還放して手を嗅げば、香氣の微妙を見る。

『大藏一覽』

『釋氏要覽』

雜器

李煜、長秋の周氏が居「柔儀殿」を偽す。香をつかさどる官女有り。その香を焚くの器を把子蓮、

○ 雜類 靈灰

蓮 三雲鳳折腰獅子小三神名  
 字 金鳳口嬰玉太古容華鼎凡  
 數 十種金玉為之  
 信 帳角爐 萑鼎  
 形 實 玉 珠  
 用 事 物 珠 亦 載 者  
 類 大 器 物 珠 亦 載 者  
 之 類 矣

爐 灰 終 日 焚 之 則 靈 若 十 日 不  
 用 則 灰 潤 如 濕 梅 月 則 灰 濕 而  
 減 火 先 須 以 別 炭 入 爐 煖 灰 一  
 二 次 入 香 炭 擊 則 火 在 灰 中 不  
 滅 可 久 焚 香  
 尾 煙  
 舶 沈 香 多 腥 烈 尾 煙 必 焦  
 香 爐 餘 塊 香 燭 共 遵 生

三雲鳳、折腰、獅子、子三神、名字、金鳳、口嬰、玉太古、容華鼎という。  
 およそ数十種に金玉にてこれを為る。  
 『清異録』

○ 信、按ずるに『事物紺珠』また載する所の者、「帳角爐」、「萑鼎」の二物を増す。また名字を出字に作る。  
 ○ 按ずるに、この物、用を知るべからず。恐らくは器物の異名か。まさ

○ 雜類

靈灰

爐灰、終日これを焚くことは、則ち靈なり。  
 もし十日用いざることは、則ち灰潤い梅月に遇うが如し。  
 則ち灰濕(湿)いて火を減す。まず、須らく別炭を以て爐に入れ、灰を煖むること一・二次すべし。  
 香炭撃を入れることは、則ち火、灰中に在りて滅えず久しかるべし。

『焚香七要』

尾煙

舶沈香は、多く腥烈。尾煙、必ず焦がる。『本草綱目』  
 香爐餘塊 香燭(火偏に母) 共に『遵生八牋』

藏香おさく 竒南香きなんかう 錫匣しやくげ 下貯密蘇合げちやくみつごくわ 鑿あ 竅くわ 爲隔則潤若枯者用白芻葉くわくわくわくわく 其之その 瘞し 土數月即復日中少暴つちかずきげつすなはちかき 尤香なほかう 埋火ひかげん 今世いまよ 燒香やかう 埋火ひかげん 蓋有所自かきあるところ 楞嚴らうげん 曰い 焚水たきみづ 沉しづ 無令見火是也なげんみづかきあはれ

香道決りし付録

燒透やうと 炭たん 鑿あ 入爐いろう 以爐いろう 灰撥はいはく 開ひらく 僅わずか 埋う 其その 丰ほう 不ず 可べ 便べん 以い 灰はい 擁よう 炭たん 火ひ 先まづ 以い 生せい 香かう 焚た 之の 謂い 之の 發は 香かう 欲ほ 其その 灰はい 鑿あ 因ゆ 香かう 蕪わ 不ず 滅め 故ゆ 耳みみ 香かう 焚た 成な 火ひ 方かた 以い 筋すぢ 埋う 炭たん 鑿あ 四よ 面めん 攢さん 擁よう 上うへ 蓋かき 以い 灰はい 厚あつ 五ご 分ぶん 以い 火ひ 之の 人ひと 卜うら 消息そくし 灰はい 上うへ 加くわ 片ぺん 片ぺん 上うへ 加くわ 香かう 則すなは 香かう 味あじ 隱いん 而して 發は 然しか 須す 以い 筋すぢ 四よ 圍ゐ 直ち 擲な 數かず

香を蔵むおさく

竒南香を蔵むるに錫匣(錫の箱)の下、密蘇合を貯え、竅(穴)を鑿(穿)ち、隔てを為ることは、則ち潤う。枯する者のごときは、白芻葉を用いて、これを苴(皆敷)にし、土に瘞むこと数月にして、即ち復す。日中少し暴(曝)し、尤も香ばし。

『物理小識』

埋火ひかげん

今の世、香を焚くに火を埋む。蓋し自る所あり。『楞嚴教』に曰く、「水沈を焚くは火を見わさしむること無かれ」とはこれなり。

『隱窟雜志』

炭鑿を焼き透し、爐に入れ、爐灰を以て撥い開き、僅かにその半ばを埋み、すなわち灰を以て炭火を擁すべからず。まず、生香を以てこれを焚く。これを「發香」と謂う。その炭鑿、香に因つて蕪し滅えざることを欲する故、香のみ焚けて火となつて、まさに筋を以て炭鑿を埋み、四面攢擁し上に蓋うに、灰を以てすること厚さ五分、火を以てするの、消息を卜し、灰の上、片を加え、片の上に香を加うるは、則ち香味隱隱として發す。然れども、須らく筋を以て、四圍直ちに數十眼を擲し、

十眼以通火氣週轉炭方不滅  
香味烈則火大矣又須取起砂  
片加灰再焚其香盡餘塊用瓦  
合收起可投入火盆中薰焙衣  
裳焚香七要  
生香生香  
燒香不在取煙先以生香焚之

發香要七 香媒香譜 香引同上  
中宗朝韋武間為雅會各携名  
香比試優劣名曰鬪香韋溫挾  
椒塗所賜常獲魁元袁勳澄懷  
錄及備異錄  
李相之賀已集謂焚香之始曰  
本佛圖澄懷襄陽國城塹水源

以て火氣を通す。週轉して炭まきに滅えず。

香味烈しきときは、則ち火大いなるなり。

また、須らく砂片を取り起こし、灰を加うべし。

再びその香を焚く。盡餘塊、瓦合(焼物香箱)を用いて収め起こし、火盆の中に投じ入れ、衣裳、薰焙すべし。

『焚香七要』

生香

香を焼くは煙を取るに在らず。「生香」を以てこれを焚く。

『八牋』

發香『七要』 香媒『香譜』 香引 同上(『香譜』)

鬪香

中宗朝(唐四代)、韋武間、雅會を為す。各々名香を携えて優劣を比し試む。「鬪香」という。

韋溫椒塗(皇后)の賜う所を挾んで常に魁を獲たり。

元の袁勳『澄懷錄』及び『清異錄』

香を焚くは漢より始まる

李相之が『賀己集』に焚香の始めを謂つて曰く、本、『佛圖澄傳』襄陽國(湖北省西北部)の城塹(堀)の水源、暴かに竭(尽)く。

暴<sup>ハル</sup>竭<sup>ト</sup>石<sup>イシ</sup>勒<sup>リキ</sup>問<sup>ト</sup>澄<sup>テイ</sup>澄<sup>テイ</sup>曰<sup>ク</sup>今<sup>イマ</sup>當<sup>ト</sup>勅<sup>ト</sup>龍<sup>リウ</sup>  
 下<sup>カ</sup>取<sup>ル</sup>水<sup>スイ</sup>乃<sup>ハ</sup>至<sup>リ</sup>澄<sup>テイ</sup>上<sup>ニ</sup>坐<sup>ス</sup>繩<sup>ヅ</sup>床<sup>ト</sup>燒<sup>ス</sup>安<sup>ニ</sup>  
 息<sup>イ</sup>香<sup>カウ</sup>咒<sup>ク</sup>數<sup>ス</sup>百<sup>ハク</sup>言<sup>ハク</sup>水<sup>スイ</sup>大<sup>ト</sup>至<sup>リ</sup>予<sup>ニ</sup>按<sup>ス</sup>江<sup>カウ</sup>  
 表<sup>ヒョウ</sup>傳<sup>デン</sup>有<sup>リ</sup>道<sup>ダウ</sup>士<sup>シ</sup>千<sup>セン</sup>吉<sup>キチ</sup>來<sup>リ</sup>吳<sup>ウ</sup>會<sup>カイ</sup>立<sup>ツ</sup>靜<sup>ジヤウ</sup>  
 舍<sup>シヤ</sup>燒<sup>ス</sup>香<sup>カウ</sup>讀<sup>ク</sup>道<sup>ダウ</sup>書<sup>ショ</sup>制<sup>セイ</sup>符<sup>フ</sup>符<sup>フ</sup>水<sup>スイ</sup>以<sup>テ</sup>療<sup>ス</sup>  
 病<sup>ビヤウ</sup>又<sup>マタ</sup>按<sup>ス</sup>漢<sup>カン</sup>武<sup>ブ</sup>帝<sup>テイ</sup>故<sup>コ</sup>事<sup>ジ</sup>亦<sup>モト</sup>曰<sup>ク</sup>昆<sup>コン</sup>邪<sup>シャ</sup>  
 王<sup>ワウ</sup>殺<sup>ス</sup>休<sup>キウ</sup>屠<sup>ト</sup>王<sup>ワウ</sup>以<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>衆<sup>シユウ</sup>來<sup>リ</sup>降<sup>ク</sup>得<sup>ル</sup>其<sup>ノ</sup>  
 金<sup>キン</sup>人<sup>ニン</sup>之<sup>ノ</sup>神<sup>シン</sup>置<sup>ク</sup>之<sup>ヲ</sup>甘<sup>カン</sup>泉<sup>セン</sup>宮<sup>クウ</sup>金<sup>キン</sup>人<sup>ニン</sup>者<sup>ノ</sup>

香道文了に付長

皆<sup>ハ</sup>長<sup>ク</sup>文<sup>ヲ</sup>餘<sup>リ</sup>其<sup>ノ</sup>祭<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>用<sup>ス</sup>牛<sup>ヲ</sup>羊<sup>ヲ</sup>唯<sup>ニ</sup>燒<sup>ス</sup>  
 香<sup>カウ</sup>禮<sup>レ</sup>拜<sup>ス</sup>然<sup>レ</sup>則<sup>チ</sup>焚<sup>ク</sup>香<sup>カウ</sup>自<sup>ラ</sup>漢<sup>ノ</sup>已<sup>ニ</sup>然<sup>リ</sup>矣<sup>ナリ</sup>  
 宋<sup>ノ</sup>吳<sup>ノ</sup>曾<sup>ノ</sup>能<sup>ク</sup>改<sup>メ</sup>齊<sup>ノ</sup>漫<sup>ノ</sup>錄<sup>ヲ</sup>及<sup>シ</sup>宋<sup>ノ</sup>高<sup>ノ</sup>似<sup>ノ</sup>孫<sup>ノ</sup>緯<sup>ノ</sup>畧<sup>ヲ</sup>  
 論<sup>ル</sup>香<sup>ノ</sup>

香<sup>ノ</sup>之<sup>ヲ</sup>為<sup>シ</sup>用<sup>ス</sup>其<sup>ノ</sup>利<sup>ヲ</sup>最<sup>モ</sup>溥<sup>シ</sup>高<sup>ニ</sup>隱<sup>シ</sup>坐<sup>ス</sup>語<sup>ル</sup>  
 道<sup>ノ</sup>德<sup>ヲ</sup>焚<sup>ク</sup>之<sup>ヲ</sup>可<sup>ク</sup>以<sup>テ</sup>清<sup>ム</sup>心<sup>ヲ</sup>悅<sup>ス</sup>神<sup>ヲ</sup>四<sup>ノ</sup>更<sup>ノ</sup>  
 殘<sup>レ</sup>月<sup>ヲ</sup>興<sup>ル</sup>味<sup>ヲ</sup>蕭<sup>ス</sup>騷<sup>ス</sup>焚<sup>ク</sup>之<sup>ヲ</sup>可<sup>ク</sup>以<sup>テ</sup>暢<sup>ス</sup>懷<sup>ヲ</sup>  
 舒<sup>ク</sup>嘯<sup>ス</sup>暗<sup>ク</sup>窗<sup>ヲ</sup>榻<sup>ヲ</sup>拈<sup>ス</sup>揮<sup>ス</sup>塵<sup>ヲ</sup>間<sup>ヲ</sup>吟<sup>ス</sup>篝<sup>ノ</sup>燈<sup>ヲ</sup>

石勒、澄に問う。澄が曰く、今の當勅す龍下り水を取ると。

乃ち澄、繩床に上がり座して安息香を焼き、

咒(まじない)、數百言に至りて、水大いに至る。

予、按ずるに江表の傳に「道士千吉」というもの有り。

呉會に來たりて靜舍立て、香を焼き、道書を読み、符水を制作して、以て病を療す。

また按ずるに、漢の武帝の故事にまたいう、昆邪王、休屠王を

殺す。その衆を以て來たり降る。

その金人の神を得たり。これを甘泉宮に置く。

金人は皆、長丈。

餘、その祭り牛羊を用いず、唯、香を焼いて拜す。

然るときは、則ち香を焚くこと漢より已に然り。

宋の吳曾が『能改齊漫錄』及び宋の高似孫が『緯畧』

香を用よう為る、その利、最も溥し。

香を論ず

高隱、坐して道徳を語り、これを焚いて、以て心を清くし、神を

悦ばしむべし。

四更(深夜)の殘月、興味、蕭騷、これを焚いて、以て懷いを暢へ

舒嘯(詩歌を小声で吟じる)すべし。

晴窗(窓)の榻(長椅子)、揮塵を拈じ、間吟し、篝燈の

夜讀焚以遠辟睡魔謂古伴月  
 可也紅袖在側密語談私執手  
 擁爐焚以薰一熱意謂古助情  
 可也坐兩閉窓午睡初足就案  
 學書啜茗味淡一爐初熟香霏  
 馥々撩人更宜醉建醒客皓月  
 清宵冰統憂指長嘯空登蒼山  
 極目末殘爐燕香霧隱々遠簾

極目末殘爐燕香霧隱々遠簾

三十一

又可祛邪穢穢隨其所適無施  
 不適品其最優者伽南止矣第  
 購之甚難非山家所能率辨其  
 次莫若沉香沉有三等上者氣  
 太厚而又嫌於□下者質太枯  
 而又涉於煙□中者約六七分  
 一兩□滋潤而幽甜而稱妙□  
 煮茗之餘即乘茶爐火便環入

又可祛邪穢穢隨其所適無施

三十一

夜読、焚いて以て遠く睡魔を辟け、いにしえより謂う、「月に伴うに可なり」と。

紅袖(女性)、側に在り、密語(囁き)、私を断じ、手を執りて爐を擁し、焚いて以て薫じ、一たび意を熱す。

いにしえより謂う、「情を助くるに可なり。」

雨に坐し、窓を閉じ、午睡初めて足り、案に就いて書を學び、

茗(茶)を啜つて味わいたし。

一爐初めて熱いて香霏馥々として人を撩(唆)なかつ。

更に醉筵、醒客に宜し。

皓月の清宵、氷統、憂指、長嘯、空しく蒼山に登る。

目を極めて遺さず爐熱し、香霧、隱々として簾を遠(巡)る。

また、邪を祛(去)り、穢を辟くべし。

その適とする所に隋いて、施して品に適せざること無し。

その最も優れる者は、「伽南」に止まる。

これを購ること甚だ難くして、山家の能くする所に非ず。

卒にその次を辨ずれば、沈香にししくは莫し。

沈に三等有り。

「上」は、氣はなはだ厚くして、反つて□を嫌う。

「下」なる者は、質はなはだ枯れて、また煙□渉る。

「中」なる者は、およそ六、七分一兩。□滋潤にして幽甜、

しかも妙と称す。

□茗を煮るの餘り、即ち茶爐の火に乘じ、すなわち環りて香鼎に入る。

香鼎徐而□之當新□景界  
 儼居太清宮與上真游不復知  
 有人世矣噫歎哉近世焚香者  
 不傳真味徒事好名兼以諸香  
 合成鬪奇爭巧不知沉香出於  
 天然其幽雅冲澹自有一種不  
 可形容之妙若修合之香既出  
 久為乾覺濃豔即如通天煉冠

香品類考卷之三十一  
 三十一

慶真龍涎雀頭等項縱製造極  
 工本價極費決不得與沉香較  
 優劣亦豈貞夫高士所宜耶  
 八  
 草木之寂香者如沉水梅檀龍  
 腦蘘合薰陸鬱金薔蔔薔薇素  
 馨末利鷄舌之屬皆產於嶺表  
 海南南遷集曰雷化已南山多

香品類考卷之三十一  
 三十一

徐やかにして□なり。當に新たに□□景界、儼居、太清宮の上  
 真と遊ぶべし。

また人世に有ることを知らず。

噫！嘆しいかな。近世、香を焚く者、真味を傳えず。

徒らに好名を事とす。

兼ねて諸香を以て合せ成し、「奇」を鬪わし、巧みを争う知ら  
 ず。

沉香は天然に出て、その幽雅、冲澹(淡)、自ずから一種有り。

この妙を形容すべからず。

修合の香のごときは、既に人に出でたり。

就いて、濃豔(艶)を覺うこと為す。即ち天に通ずるが如し。

煉冠、慶真、龍涎、雀頭(香附子)等、あらかじめ製造をほしい  
 ままにし、工を極む。

本値、極めて費やし、決して得ず。

沉香と優劣を較ぶれば、また豈、貞夫、高士の宜しき所ならん  
 や。

『遵生八牋』

草木の最も香ばしき者は、沈水、梅檀、龍腦、蘘合、薰陸、

鬱金、薔蔔(クチナシ)、薔薇、素馨(ソケイ)、末利(ジャスミン)、

鷄舌(クローブ)の属の如き、皆、嶺表に産す。

海南、『南遷集』にいう「雷化已に南山に多し。

茯苓藿香芬芳襲人動或數里  
 予嘗推其理火盛於南方實能  
 生土土味性甘而臭香其在南  
 方乘火之王得其所養英華發  
 外是以草木皆香此實理性之  
 自然而前此說香自范蔚宗以  
 下味嘗有及此也黃帝書言五  
 氣香氣溼脾古人固知之矣楞

香道史の目録 三三三

嚴曰純燒沉水無令見火此自  
 佛以來燒香妙方也沈一作誌 寓簡  
 說文曰芳也篆從黍從甘隸省  
 作香春秋傳曰黍稷馨香凡香  
 之屬皆從香香之遠聞曰馨香  
 之美者曰馥使音香之氣曰馥兼  
 香一譜 香志大尾

燻冠、茯苓(マツホド)、藿香(パチユリ)、芬芳(芳しい香り)、人  
 を襲う。

やや或いは數里。予、嘗てその理を推すに、火は南方に盛んなり。  
 實に能く土を生ず。

土の味わい、性甘くして、臭香、その南方に在りて、火の王に乗  
 じて、その養う所を得たり。

英華、外に發す。これを以て草木皆香ばし。  
 この實理、性、自然にしてすむ。

これ香を説くこと『范蔚宗』より以下、未だ嘗てここに及ぶこと  
 有らざるなり。

『黃帝書』、「五氣」を言う、「香氣は脾に集まる。」  
 古人、固よりこれを知る。

『楞嚴教』に曰く、もっぱら沈水を焼いて火をあらわさしむること  
 と無かれ。これ仏よりこのかた、香を焼く妙方なり。

沈作誌が『寓簡』

香を述ぶる

『説文解字』に曰く、「芳」は篆書に「黍」に従い、「甘」に従う。

隸書に省いて「香」に作る。

『春秋傳』に曰く、「黍稷」、「馨香」の屬、皆「香」に従う。

香の遠く聞こゆるを「馨」という。

香の美なる者を「馥」という。『音使』

香の氣を「馥」という 『火兼』及び○『香譜』

香志大尾

<p>秋表之續編 香道千代農秋 全部四冊 追分版行</p>	<p>杏熏堂藏版 享保十八癸巳七月吉旦</p>
<p>京師書坊 東都書坊 攝陽書坊</p>	<p>堀川通高辻上ル町 植村藤右衛門 通石町三丁目 植村藤三郎 高麗橋壹丁目 植村藤三郎</p>

秋農光統編

香道千代農秋 全部四冊 追って版行

杏熏堂藏版

享保十八癸巳七月吉旦

京師書坊 堀川通高辻上ル町

植村藤衛門

東都書坊 通石町三丁目

植村藤三郎

攝陽書房 高麗橋壹丁目

植村藤三郎

令和六年 月

『香筵雅遊』

國井和裕